

【八】²⁴⁵⁶六共兵具

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
六	ロク むい むつ むつ	𠄎 𠄎 𠄎	𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	王勃詩序
		𠄎 𠄎	𠄎	𠄎					
共	キョウ とも	𠄎 𠄎 𠄎	𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	杜家立成
		𠄎 𠄎	𠄎	𠄎				𠄎 𠄎	杜家立成
		𠄎 𠄎	𠄎						
		𠄎 𠄎	𠄎						
兵	ヘイ ヒョウ つわもの	𠄎 𠄎 𠄎	𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	瑠玉集
		𠄎 𠄎	𠄎	𠄎			𠄎 𠄎		
		𠄎 𠄎	𠄎						
		𠄎 𠄎	𠄎						
		𠄎 𠄎	𠄎						
		𠄎 𠄎	𠄎						
具	グ そなえる そなわる つぶさに	𠄎 𠄎 𠄎	𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	王勃詩序
		𠄎 𠄎	𠄎	𠄎			𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	法華義疏
		𠄎 𠄎	𠄎						
		𠄎 𠄎	𠄎					𠄎	

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
六	六	六	六	六			六	六	六	六	六	六
元暦萬葉①	節用	八2										現代中国
共	共	共	共	共			共	共	共	共	共	共
粘葉本朗詠	節用	八4										現代中国
		𠄎										
兵	兵	兵	兵	兵				兵	兵	兵	兵	兵
粘葉本朗詠	節用	八5										現代中国
	兵											
具	具	具	具	具	具	具	具	具	具	具	具	具
元暦萬葉①	出世太平記	八6								○		現代中国

【六】説文篆文の字体はちょっとおかしい？ 現代中国も「具」。

【兵】現在の字体で書かれるようになったのは、中国の南北朝期あたりらしい。

【具】中国の南北朝期以降は「具」ではなく「具」と書かれることが多い。干祿字書、九經字樣、康熙字典、文部省活字、

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
其	キ その								人①
典	テン さかん つかさどる のり								教4常①
兼	ケン かねる かねて								常①
円	エン まるい まどか まる								教1常①
圓									人②

【其】『説文解字』『甲骨文編』『金文編』に「其」では掲載されず、「箕」として掲載。『甲骨文編』『金文編』などをまとめた『古典文字字典』には「其」は「箕」の籀文とある。白川静は「其」は「箕」の元の字としている。

【兼】楷書では下部が「灬」になる字体が一般的。干禄字書の

序文には2種類の字体が使われている。

【円】「円」の字体は中国では使用例が見えない。日本では空海の「三十帖策子」に使用例があり、その後ずっと使われ続けている。「円」は「圓」の「員」を縦線に略してできた字体だと思われる。弘道軒に「圓」の字体が見えない。「圓」は楷

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
其	甚	其	其	其			其					其
其	其	其	其	其								其
其	其	其	其	其								其
其	其	其	其	其								其
典	典	典	典	典			典	典	典	典	典	典
典	典	典	典	典								典
兼	兼	兼	兼	兼			兼	兼	兼	兼	兼	兼
兼	兼	兼	兼	兼								兼
円	圓	圓	圓	圓			圓	圓	圓	圓	圓	圓
圓	圓	圓	圓	圓								圓

書では「員」の「口」を「ム」または「△」に書く。これは四角の連続を避けて変化をつける意識が働いているのかもしれない。「口」を点2つに略するのは漢代から行われているが、「口」を点2つに略するのは鎌倉時代以降か。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
内	ナイ ダイ うち いれる								
内									
冊	サク サク ふみ								
冊									
箒									
再	サイ サ ふたび								

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
内	内	内	内	内	内	内	内	内	内	内	内	内
内	内	内	内	内	内	内	内	内	内	内	内	内
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊
箒	箒	箒	箒	箒	箒	箒	箒	箒	箒	箒	箒	箒
再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再
再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再

【内】この字の注意点は「人」か「入」か、最終画をハラウか止めるか、の2点。康熙字典では「入」部に分類。

【冊】説文篆文に倣えば康熙字典にあるように横線が左右に出ない字体になるはず。説文古文の字体は甲骨にも金文にも見えない。康熙字典に「冊」は載っていない。文部省活字も

「冊」ではなく「冊」。太宰が「冊」を書いているが明朝体で字を覚えたのだろうか。『明朝体活字字形一覽』によれば、「冊」の登場は1860年の英華書院の13.5ポイント、明朝体での「冊」の登場は1887年の大阪国文社五号が最も早い。

【再】説文篆文に従えば横線はすべて左右に出る。真ん中の

横線を出さなくなったのは清と江戸時代か。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
凋	チョウ しほむ		凋	凋			凋	凋	凋
①			説文篆文	張表碑			道因法師碑	干祿字書	性霊集
								凋	凋
								凋	凋
								凋	凋
凍	トウ こおる ここえる		凍	凍			凍	凍	凍
常①			説文篆文	武威漢簡			唐雲墓誌	干祿字書	杜家立成
								凍	凍
								凍	凍
凌	リョウ しのぐ		凌		凌	凌	凌	凌	凌
人①			説文篆文		書譜	東方朔画贊	泉男生墓誌	干祿字書	
			凌					凌	凌
								凌	凌
涼	リョウ すずしい すずむ		涼	涼	涼	涼	涼	涼	涼
人②			説文篆文	居延漢簡	石門頌	淳化閣帖	黃庭経	元詮墓誌	九成宮
								涼	涼
								涼	涼
涼	リョウ すずしい すずむ						涼	涼	涼
常①							張猛龍碑	王知敬・李靖碑	江戸干祿
								涼	涼
								涼	涼
凜	リン		凜		凜		凜	凜	凜
人②			説文篆文		書譜		玉台新詠2	五経文字(説文)	王勃詩序
								凜	凜
								凜	凜
凝	ギョウ こらす こる				凝	凝	凝	凝	凝
常①					十七帖	集字聖教序	高麗碑	孔子廟堂碑	五経文字
								凝	凝
								凝	凝
								凝	凝
								凝	凝
								凝	凝
								凝	凝

【凍】説文篆文は「冫」だが漢代の武威漢簡、北魏の唐雲墓誌は「冫」に従っており、干祿字書も「冫」を〈正〉とし、「冫」を〈俗〉とする。九経字様では説文篆文に従って「冫」の字体を載せている。我が国では「冫」に従った字体が標準。
【凌】説文篆文には或体があり、現在も字体は或体の系統。通

用体では旁を「麦」とすることが多く、文部省の漢字整理案でもこの字体が検討されたことがあった。偏を、誤って「冫」にすることがあるが、「凌」と「凌」は別字。
【涼】「涼」の異体字。説文篆文では偏が「水」で、干祿字書は「涼」を〈正〉とし、「冫+京」を〈俗〉としている。五

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
凋	凋	凋	凋									凋
粘葉本朗詠	開化一寸用文	冫 8										現代中国
凍	凍	凍	凍				凍	凍	凍	凍	凍	凍
粘葉本朗詠	節用	冫 8										干祿〈俗〉 現代中国
	凍											
	凍	凍	凍	凍	凍	凍	凍	凍	凍	凍	凍	凍
												現代中国
涼	涼	涼	涼	涼	涼	涼	涼	涼	涼	涼	涼	涼
藤原行成	節用	冫 8										江戸干祿〈俗〉 現代中国
涼	涼	涼	涼				涼	涼	涼	涼	涼	涼
法輪寺切		冫 8										現代中国
凜	凜	凜	凜				凜	凜	凜	凜	凜	凜
藤原行成	久松切	冫 13										平安・屏風土台 現代中国
凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝
雲紙本朗詠	節用	冫 14										現代中国
凝	凝											
元暦萬葉⑦												

経文字に「冫は訛」とある。中国では「冫」が書かれていたが、唐代末以降は「冫」が多くなる。弘道軒の「涼」は「涼」よりも出来が悪い。文部省活字に「涼」「涼」の両方がある。漱石も大字も手書き原稿では「涼」を書いているが、印刷本では「涼」。「京」は「京」と書かれることが多い。「冫」を

「冫」とするのは草書の影響か。現代中国では「涼」に統一。
【凜・凜】旁の下部は「示」か「禾」か。基本的に正字体を示す説文解字、五経文字、康熙字典、文部省活字のうち、康熙字典だけが「示」を採用。現代中国は康熙字典の字体に統合されている。説文篆文は「冫」でなく「冫」。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
凡	ボン ハン およそ すべて 常①	𠂔 𠂔 𠂔	𠂔	𠂔 𠂔	𠂔 𠂔	𠂔 𠂔	𠂔 𠂔	𠂔	
			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	
				𠂔			𠂔		
処	ショ おく おる ところ 教6常①	𠂔 𠂔	𠂔	𠂔 𠂔	𠂔 𠂔	𠂔 𠂔	𠂔 𠂔	𠂔	
處		𠂔	𠂔	𠂔 𠂔	𠂔		𠂔	𠂔	
			𠂔	𠂔			𠂔		
			𠂔	𠂔			𠂔		
凡	たこ 人①						𠂔		
凡	なぎ なく 人①						𠂔		
凰	オウ 人②						𠂔		
凱	ガイ 人①			𠂔			𠂔 𠂔	𠂔	
							𠂔 𠂔		
豈	ガイ キ あに	𠂔 𠂔	𠂔	𠂔 𠂔	𠂔 𠂔	𠂔 𠂔	𠂔 𠂔	𠂔	
							𠂔 𠂔		

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
		凡 凡			凡		凡 凡	凡 凡	凡 凡			凡 凡
												凡
												凡
處	処	処	処	処	処	処	處	処	處	処		處 処
處	處	處	處	處	處	處	處	處				處
處	處						處					
							處					
												凡
												凡
												凰
												凱
												凱
												豈

【処】説文では「処」を親字として掲げ、「處」を或体(異体字)としている。説文に従えば「処」は「處」の略字ではない。金文にも「処」と思われる字体がある。金文の「処」の左側は「人」だろう。「処」「處」それぞれに正字体と通用体がある。馬王堆の字体が「処」の通用体。五経文字で〈俗〉

としている字体が「處」の通用体。漱石は「処」「處」両方の字体を使うが、「処」の使用は「ところ」と訓読みする場合の1度だけ。音読み及び熟語での使用は「處」を使う。
【凱】一部の書道字典には「本は豈」「豈の俗字」などの記述がある。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
凶	キョウ わるい 常①								性霊集
凹	オウ くぼみ くぼむ 常①								
出	シュツ スイ だす でる 教1常①								王勃詩序
凸	トツ 常①								
函	カン はこ 人①								畫圖識文
函	②								伊都内親王願文
									性霊集
刀	トウ かたな 教2常①								王勃詩序
刃	ジン は やいば 常①								法隆寺獻物帳
刃	②								
刃									上孫家筆漢簡

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考

【凹】ほとんどの書道字典には不掲載だが、唯一『五體字類』第三版に「懷素」が掲載されている。
【出】「山」が2つと解する字体は南北朝期に出現するが、この字体は九經字様では「訛」としている。『陸軍幼年学校用字便覧』では「山」の下に「々」を配する字体が掲載されてい

るが、実際の使用例は未見。「山」の下に点を2つ書く例は近世の文書に使用例がある。
【凸】ほとんどの書道字典には不掲載だが、唯一『五體字類』第三版に「宋人」の書として1例掲載されているが、出典が確定できないので本書には載せなかった。

【函】説文篆文には2種の字体がある。1つは「マ+口+彡」、もう1つは「肉+今」の字体。「マ+口+彡」と「函」は字体が一致しない。白川静説では「マ+口+彡」と「函」は元々は別字で、発音が同じために混用されたとする。「肉+今」に合致する字はみつけれない。日本の人名用漢字の字体は康熙字典に由来し、現代中国の字体は唐代の楷書に由来するようだ。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
刈	ガイ かる	𠄎	刈	𠄎	𠄎	刈	刈		
茹	①	𠄎	茹				茹		
乂	②								
切	セツ サイ きる ぎれる		切	切	切	切	切	切	切
分	フン・ブ ブン・わか つ・わか れ る・わか れる	分	分	分	分	分	分	分	分
刊	カン きる けずる		刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊

【刈】「刈」「茹」「乂」は異体字。もともとは「乂」でそれに「刀(刂)」がついて「刈」となり、さらに「艹」がついて「茹」になったようだ。康熙字典には「茹」が見えない。「乂」が「ヌ」になる場合が多い。

【切】偏は説文篆文では「七」。干禄字書ではなぜか「土」。九

経字様では「七」。通用体では「十」が多い。これは干禄字書では〈通〉、九経字様では〈訛〉とされている。漱石は「土」「七」の両方を書いている。もしかしたら漱石は干禄字書を見ていたのではないだろうか。

【分】この字の「刀」は南北朝期あたりに書き順と字体が変わ

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
刈	刈	刈	刈	刈			刈	刈		刈		刈
茹	茹	茹	茹									茹
乂		乂										乂
切	切	切	切	切	切	切	切	切	切	切	切	切
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊

る。草書の書き方の影響を行書、楷書が受けたのだろうか。その字体は干禄字書で〈通〉とされている。この字は文字通り分けるのだから、本来、上部の屋根がくっついてはいけない。くっつく字体は江戸に現れる。そのいけない字体を漱石が踏襲しているが、同時に草書の字体も使っている。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
刑	ケイ のり								
刑									
刑									
列	レツ つらなる つらねる								
列									
列									
列									
初	ショ うい・そめ る・はじめ はじめて・ はつ・うぶ								
初									
初									
判	ハン バン わける								
判									
判									
別	ベツ わかれる								
別									
別									

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
刑	刑	刑	刑	刑	刑		刑	刑	刑	刑		刑
		刑			判							判
		刑			刑							
列	列	列	列	列	列		列	列	列	列		列
初	初	初	初	初			初	初	初	初	初	初
									別			
判	判	判	判	判	判		判	判	判	判	判	判
別	別	別	別	別	別		別	別	別	別		別

【刑】書道字典には「刑」と「井+リ」を別字としているものと、異体字としているものがある。本書では後者の説を採った。ちなみに説文も、康熙字典も別字としている。説文篆文の偏が「井」の字体は他に見えない。
【初】南北朝から誤って示偏が書かれることが多くなる。法

華義疏では偏に「禾」を書いている。江戸版本では示偏が圧倒的で、衣偏の使用例がみつからないほど。漱石は示偏を書いている。法輪寺切は示偏だとしてもおかしい字体。
【判】偏の縦線は唐代まではまっすぐに書き、左に流すものではなかったようだ。左に流している例が確認できるのは北

宋。日本でも上代ではまっすぐに書いている。康熙字典はまっすぐだが、現代中国の印刷字体は左に流している。日本の印刷字体ではまっすぐなのと左にながす例が半々くらいだった。文部省活字も当用漢字表も左に流している。
【別】古代の字を見ると偏は「高一口」で、馬王堆まではその

字体を書いている。九経字様では偏が「高一口」の字体を説文、「別」を隸省としている。偏の下部を「力」とする字体が南北朝時代からあり、我が国でも上代の王勃詩序はその字体を書き、その後もその字体が優勢。現代中国でも偏の下部を「力」とする。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
利	リきく ずるとい								
券	ケン わりふ								
刻	コク きざむ とき								
刷	サツ ずる はく ほけ								
刺	シ ささる さす そし とげ								
制	セイ おさえる								
到	トウ いたる								

【刻】説文篆文、五經文字、康熙字典の一画目は共に横線。智永千字文の行書、彌玉集や粘葉本朗詠では3～4画の書き順が現在小学校で教えられているのとは逆である。楷書もこのような書き順で書かれていたのかもしれない。智永千字文の行書は偏の最終2画が「冫」の最終2画のように上の方に書

かれている。通用体活字と漢字整理案に異体字があるが、これは智永千字文の行書のように書かれたものを見誤ったものだろう。宋元以来俗字譜にもこのような異体字が見える。康熙字典の古文は根拠を確認できない。

【刺】睡虎地秦簡や漢以降に書かれた字体を見るかぎり、説文

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
利												利 現代中国
券												券 千祿<通> 現代中国
刻												刻 現代中国
刷												刷 現代中国
刺												刺 五經<詠> 現代中国
制												制 現代中国
到												到 現代中国

篆文の字体は誤りなのではないか。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
剗	セツ サツ セチ テラ 新②		剗 説文新附				剗 剗 敬史君碑 昭仁寺碑		剗 王勃詩序
							剗 剗 孫遊浮図銘記 信行禪師碑		剗 聖武天皇雜集
							剗 仏説賜仏 三味海經		
削	サク けずる 常①		削 睡虎地秦簡 説文篆文	削 馬王堆	削 孔彪碑	削 書譜	削 削 削 削 元維墓誌 樊興碑 干祿・序 王勃詩序		削 現代中国
前	ゼン まえ さき すすむ 教2常①	前 甲骨1	前 金文1 郭店楚簡 説文篆文	前 馬王堆	前 衡方碑	前 十七帖	前 前 前 前 集字聖教序 出曜経注解 雁塔聖教序 九経字樣 王勃詩序		前 現代中国
舟		舟 甲骨2	舟 金文2 睡虎地秦簡	舟 居延漢簡	舟 石門頌		舟 鄭義下碑		舟 現代中国
				舟 武威漢簡	舟 趙寬碑				舟 現代中国
則	ソク すなわち のつとる のり 教5常①		則 何尊	則 睡虎地秦簡	則 権量銘	則 銀雀山竹簡	則 則 則 則 西嶺樂山廟碑 智永千字文 集字聖教序 鄭義下碑	則 則 江戶干祿・序 王勃詩序	則 現代中国
			則 睡虎地秦簡	則 説文篆文	則 馬王堆				
			則 睡虎地秦簡	則 説文古文					
			則 睡虎地秦簡	則 説文古文					
			則 郭店楚簡	則 説文籀文					
			則 長沙子彈倉 楚帛書						
剗	テイ そる ①		剗 説文篆文				剗 大般涅槃經6	剗 五経文字	剗 大聖武

【剗】説文には未掲載。新附に「柱也。从刀、未詳。殺省聲。」とある。文部省活字では偏の「ホ」に点がついている。
【前】もとは「止」と「舟」を合わせた「舟」の字体らしい。甲骨には「行(十字路の形)」のついたものもある。「舟」に「刀」が加わり、「止」が略体になったものが「前」らしい。

あったものが略されるのならわかるのだが、なぜ「刀」が加えられたのかは謎である。説文には別字で「止+舟+刀」の字体の篆文が載っている。これは「剪」という字である。元々「止+舟+刀」の字体なのにさらに「刀」を加えて「剪」となった。こちらもなぜ「刀」が加わったのか謎である。

平安中期 から 室町	江戸版本 1716年 部首・画数	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
剗 剗 剗 色紙法華經卷 藤栗毛		剗 刀6					剗					剗 現代中国
削 削 削 削 削 関戸本朗詠 庭訓往来		削 刀7					削 削			削 ×		削 現代中国
前 前 前 前 前 粘葉本朗詠 節用		前 刀7					前 前 前 前 字典體			前 ×	前 九経<録省>	前 現代中国
		舟 古文					舟 標準體				舟 九経	舟 現代中国
		舟 古文									舟 説文	舟 現代中国
則 則 則 則 則 粘葉本朗詠 家道訓		則 刀7					則 則			則		則 現代中国
		剗 節用										
		剗 古文										
		剗 古文										
		剗 古文										
		剗 古文										
剗 剗 剗 剗 墨流本朗詠 庭訓往来		剗 刀7					剗					剗 現代中国

【則】古代には4種から5種の字体があったようだ。説文では「則(貝+刀)」の字体が正体とされていて、漢代以降もその字体が書かれているから、始皇帝時代に統一された字体は「則(貝+刀)」だったのだろう。ところが権量銘に用いられている字体は「鼎+刀」である。始皇帝は度量衡の統一と文

字(字体)の統一をしたといわれるが、まず度量衡の統一をして、後に文字(字体)の統一をしたのだろう。
【剗】南北朝期より古い使用例がみつからない。五経文字には説文篆文に対応する字体が「𠂔」部に掲載されている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
剥	ハク・ホク はかま・とる はがれる・ はぐ・はげる むく	𠄎	𠄎	剥	剥	剥	剥	剥	剥
剥			𠄎	剥	剥				
剖	ボウ さく わかれる		剖	剖			剖	剖	剖
剩	ジョウ あまつさえ あまり あまる							剩	剩
剩								剩	剩
副	フク そう そえる		副	副	副		副	副	
				副			副		
							副		
							副		
割	カツ さく・わり わる・わ れる・きる	割	割	割	割	割	割	割	割
割		割					割	割	
		割					割		
		割					割		
		割					割		

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
剥	剥	剥	剥	剥			剥		剥			剥 現代中国
剥	剥	剥	剥									
		剖	剖				剖	剖	剖			剖 現代中国
剩	剩	剩	剩	剩			剩	剩	剩			剩 現代中国
		副	副				副	副	副			副 現代中国
割	割	割	割	割	割		割	割	割	割	割	割 現代中国
割												割 明・佛山
割												

【割】 通用体では偏を「害」ではなく「宀+土+口」を書く。説文の前後の時代の字体を見比べると、説文篆文の字体が特異なようだ。説文に倣った五経文字や康熙字典も特異な字体だ。「割」が一般的になるのは元の馮子振以降。途中に魏の鐘繇の「宣示表」が一例だけ「割」を書いているのは奇異に感じる。日本で「割」が見られるのは、平安時代の墨流本朗詠集。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
劍	ケン つるぎ 人②	𠄎	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍
劍	常①	𠄎	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍
劍		𠄎	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍
劍		𠄎	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍
力	リョク リキ ちから つとめる 教1常①	𠄎	力	力	力	力	力	力	力
加	カ くわえる くわわる 教4常①	𠄎	加	加	加	加	加	加	加
功	コウ く いさお 教4常①	𠄎	功	功	功	功	功	功	功
功		𠄎	功	功	功	功	功	功	功
劣	レツ おとる 常①	𠄎	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
		𠄎	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
		𠄎	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
		𠄎	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍
劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍
劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍
劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍
力	力	力	力	力	力	力	力	力	力	力	力	力
加	加	加	加	加	加	加	加	加	加	加	加	加
功	功	功	功	功	功	功	功	功	功	功	功	功
功	功	功	功	功	功	功	功	功	功	功	功	功
劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣

【劍】当用漢字字体表から現在の常用漢字まで使われている「劍」は江戸時代に一般化された字体らしい。中国では清代が最初。ただし、「劍」の偏の字体は既に鎌倉時代の墨流本朗詠にある。中国では宋代の印刷本にある。当用漢字字体表が発表された時点で、岩田母型製造所には「劍」の字体の母

型はなく、印刷字体としては一般的ではなかったようだが、弘道軒清朝にはある。いつ作られたものだろうか。

【功】南北朝期は、劣を「刀」とする字体が多数派。これは書聖といわれる王羲之が誤字を書いた影響ではないだろうか。劣を「刀」とする字体を干禄字書は〈通〉としているが、五

経文字では〈訛〉と訂正している。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
劫	ゴウ おびやかす 人①								光明皇后 薬教論
劫									光明皇后 出家立成
劫									
助	ジョ すけ たすかる たすける 教3常①								王勃詩序
努	ド つとめる ゆめ 教4常①								夫努丘萬墓誌
									招来目録
励	レイ はげます はげむ 常①								王勃詩序
勵									
勞	ロウ いたわる つかれる ねざらう 教4常①								王勃詩序
勞									聖武天皇集
									聖賢指歸

【劫】干祿字書は「劫」を〈通〉、「劫」を〈正〉としている。五経文字は「劫」を示し解説に「……従刀者本之或體今經典並従力」とある。古代に或体の例はみつからないが、後漢の武氏祠画像題字に旁を「リ」とする例がある。

【助】古代から偏の一番下の横線を旁の下まで伸ばす字体が

あった。草書にもその字体によるものがあるが、草書では偏の一番下の横線を最後に書く。南北朝期は偏を「目」とした。五経文字に「従目註」とある。日本でも偏を「目」とする霊が多数派で、漱石も太宰もその字体を書いている。

【努】古い使用例がみつからない。中国で最も古い使用例が

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考

孫過庭の「書譜」で7世紀末。日本での最古の使用例は「美勞丘萬墓誌」で8世紀の初め。篆書や隸書では「努」を使う。【励】「勵」の「萬」を「万」にかえた字体。中国では宋代の印刷本に使われているが、書道字典には見えない。日本では江戸時代に多く使われる。弘道軒には「励」の字体しかない。

説文篆文では「勵」の字体のみ掲載。五経文字にも「勵」だけが掲載。康熙字典には「勵」と「勵」が異体字ではなく別々に掲載されている。

【勞】「火」二つを点三つに略すのは江戸時代から。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
勁	ケイ つよい		勁	勁	勁	勁	勁	勁	勁
			勁				勁	勁	
勉	ベン		勉	勉	勉	勉	勉	勉	勉
			勉				勉		
勉	ベン つとめる								
勩	カン かんがえる		勩				勩	勩	勩
							勩		
勩	ドウ うごかう うごく ややもすれ ば		勩	勩	勩	勩	勩	勩	勩
			勩				勩		
							勩		
務	ム つとめる つとまる		務	務	務	務	務	務	務
			務				務		
勩	キン つとまる つとめる		勩	勩	勩	勩	勩	勩	勩
			勩				勩		
勩	人③		勩				勩	勩	勩

【勉／勉】中国では昔も今も正字も慣用字体もすべて「勉」。康熙字典にも「勉」はあるが「勉」はない。「勉」が現れるのは日本の江戸期だが、草書は「勉」をくずした字体。漱石も江戸期と同じ。当用漢字表は「勉」で、当用漢字字体表で「勉」に変更。当用漢字字体表の発表時、岩田母型製造所には

「勉」の字体の母型はなかった。
【勩】説文にはなく新附で追加された。新附と五経文字では「廿+匹+力」の字体だが康熙字典はそれに従っていない。偏の2本の縦線のうち、左の縦線を上に出さない字体が平安から江戸にかけて見られる。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
勁		勁	勁		勁							勁 千祿<俗> 現代中国
勁												
勉		勉	勉	勉				勉				勉 現代中国
勉		勉	勉	勉				勉	勉	勉		
勩		勩	勩	勩				勩	勩	勩		勩 現代中国
勩												
勩		勩	勩	勩	勩			勩	勩	勩		勩 現代中国
勩		勩	勩	勩	勩			勩	勩	勩		勩 現代中国
務		務	務	務	務			務	務	務		務 現代中国
勩		勩	勩	勩	勩			勩	勩	勩		勩 現代中国
勩		勩	勩	勩	勩			勩	勩	勩		勩 現代中国

【務】「力」を下部中央に書く移構の文字が日本にはある。「支」は「攴」に変化するが「攴」に誤ることがある。弘道軒が「攴」に誤った字体。現代中国も「攴」の字体。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
勝	ショウ かつ まさる たえる 教3常①		勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝
勝				勝			勝	勝	
募	ボ つのる 常①		募	募			募	募	募
勸	カン すすめる 常①		勸	勸	勸	勸	勸	勸	勸
勸				勸			勸	勸	
勢	セイ いきおい 教5常①		勢		勢		勢	勢	勢
勢							勢	勢	
勳	クン いさお 常①		勳	勳	勳	勳	勳	勳	勳
勳	人②		勳	勳			勳	勳	
							勳		

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
勝	勝	勝	勝	勝	勝		勝	勝	勝	勝	勝	勝
勝		勝	勝	勝								勝
	募	募		募			募	募	募	募		募
勸	勸	勸	勸	勸	勸	勸	勸	勸		勸		勸
	勸			勸				(勸)				
	勸											
勢	勢	勢	勢	勢	勢	勢	勢	勢	勢		勢	勢
勢				勢	勢				勢		勢	
勳	勳	勳	勳		勳	勳	勳	勳	勳	勳	勳	勳
		勳										

【勝】干禄字書で偏の「月」の中が横線なのを五経文字で点に訂正している。康熙字典も文部省活字も同様に点。当用漢字表もこの図版でははっきりしないが点であったとされる。
【募】康熙字典ではこの字のくさかんむりを4面に数える。
【勢】説文篆文にはなく、新附で追加された。左上の部分に

様々な字体がある。
【勳】「員」に従う字体があり、後にもまれに書かれることがある。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
包	ホウ つつむ								篆隸萬象名義
包									
化	カケ ぼかす ぼける かわる								法華義疏
化									王勃詩序
北	ホク きた にげる								法華義疏
									王勃詩序
匙	シ セ ギ								
匣	ソウ								顏魯公入 交名帳
市									無量義經
									篆隸萬象名義
									佚名白詩

平安中期 から 室町	江戸版本 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
											包 現代中国
											化 現代中国
											北 現代中国
											匙 現代中国
											匣 現代中国

【包】正字は「包」で、隸書でも「包」。唐代以降は「包」「匚」どちらの字体も書かれてきた。当用漢字表では「包」だが当用漢字字体表で「匚」に変更された。変更する必要があったのだろうか。当用漢字字体表の発表時点で岩田母型に「匚」の字体はなかった。

【化】古代の文字および説文篆文に照らせば「化」ではなく「匕」が正字であり、手書きでも正字が多く書かれてきた。康熙字典の字体は不自然。
【北】手書き書体で、偏の縦線が下に突き出ることはない。正字体の多い文部省活字でさえ偏の縦線は下に出ていない。当

用漢字字体表の字体は康熙字典など明朝体の字体である。
【匣】「市」が元の字らしい。南北朝期に「市」に「しんにょう」が加わった異体字が現れる。「匣」は「しんにょう」を「L」のように書いたものと「市」の1画目の横線とが合体して「匚」と解釈されたものだろう。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
匡	キョウ ただす 人①								聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集
匠	ショウ たくみ 常①								法華義疏
									聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集
匪	ヒ ①								聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集
区	ク 教3常①								王勃詩序
									王勃詩序
匹	ヒツ ひき たくい 常①								聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集
疋	ひき あし 人①								聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												匡 現代中国
												匠 千祿<俗> 現代中国
												匪 現代中国
												区 現代中国
												匹 千祿<俗> 現代中国
												疋 五経<説> 「足」郭店楚簡 「足」説文

【匡】南北朝以降は「主+L」の字体が多数派。
 【匠】中国の南北朝から日本の中世まで「匚」の「L」を「乚」と誤った字体が多数派。
 【匹】「L」を「乚」と誤った字体がある。「疋」と「匹」は異体字として扱われることがある。五経文字では「疋」を<説>

としている。現代中国では「疋」と「匹」を統合して「匹」のみを使う。「疋」は「足」と字体が同じになることがある。江戸版本に「区」の字体がある。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
医	イ いやす		醫	醫	醫	醫	醫	醫	醫
醫			醫	醫			醫	醫	醫
匿	トク かくす かくれる		匿	匿	匿	匿	匿	匿	匿
十	ジュウ ジツと とお		十	十	十	十	十	十	十
千	セン ち		千	千	千	千	千	千	千

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
醫	醫	醫	醫		医	医	醫	医	醫	医	医	醫
醫	醫	医	医		医		醫	医		醫		醫
					医							
					医							
					医							
匿	匿	匿	匿				匿	匿	匿	匿	匿	匿
十	十	十	十	十			十	十	十	十	十	十
千	千	千	千	千			千	千	千	千	千	千

【医】「医」と「醫」はもともとは別字。「醫」の略体が「医」と字体衝突した。「醫」の略体として「医」を使うのは江戸期からか。江戸版本では「医」が大多数。干禄字書では「巫」に従う字体を〈通〉としているが、五経文字では〈俗〉としている。文部省活字は「醫」だが、太宰治は『人間失格』の

直筆原稿中、「醫」を1回、「医」を7回使っているところを見ると、略体の「医」は学校教育とは別にかなり浸透していたと推定できる。

【十】²午²升³半

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
午	ゴウマ 教2常①								
升	ショウ ますのほる 常①								
半	ハン なかば 教2常①								

平安中期 から 室町	江戸版本 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
											午 現代中国
											升 五経文字(詠) 現代中国
											半 現代中国

【升】南北朝以降は咎なし点が付くことが多い。逆にいうと隸書には咎なし点は付かない。
 【半】漢字整理案に字典体と標準体の別がある。当用漢字字体表で標準体が採用されたが、岩田母型製造所にはその字体の母型がなく、新刻された。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

【十】協卒卓卑

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
協	キョウ かなう								
協									
悒									
卒	ソツ おわる ついに にわか								
卒									
卒									
卒									
卒									
卓	タク								
卓									
卓									
卑	ヒ いやしい いやしむ いやしめる								
卑									
卑									

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												協 現代中国
												卒 千祿<通> 現代中国
												卑 九経<説> 現代中国

【協】五経文字では「協」を訛とはせず、「心部亦有協字與此同並訓和案」としている。

【卒】南北朝に「卒」から異体字の「卒」ができる過程がよくわかる。

【卓】石門頌では伸ばす線がまだ1本に統一されていない。

【卑】金文では「田+支」だが、説文では「甲+又」になっている。「支」の上部を「田」と合体させて「甲」にしている。この角が「甲」に角がついているが、説文では「甲」単体の字にも角がついているので、これは字画ではなく説文の様式なのかかもしれない。この角を字画として書いたものは

説文以降もなかったが、字画として解釈したものが康熙字典の字体に採用されている。九経字様は「甲+又」としているが甲の下部の縦線をまっすぐに書いている。これは説文篆文と見比べるとおかしな解釈だともう。説文篆文を正字の根拠とするなら、正字は常用漢字の「卑」ではなく、人名用漢字の「卑」の方だろう。中国常用も「卑」を採用している。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
単	タン ひとえ								法華義疏
單	人②								王勃詩序
									杜家立成
南	ナン みなみ								王勃詩序
卑	ヒ いやしい いやしむ ひくい								王勃詩序
卑	人③								龔替指歸
博	ハク バク ひろい ひろめる								王勃詩序

【卑】金文では「田+支」だが、説文では「甲+又」になっている。「支」の上部を「田」と合体させて「甲」にしてしまったのだろう。「甲」に角がついているが、説文では「甲」単体の字にも角がついているので、これは字画ではなく説文の様式なのかもしれない。この角を字画として書いたものは

説文以降もなかったが、字画として解釈したものが康熙字典の字体に採用されている。九経字様は「甲+又」としているが甲の下部の縦線をまっすぐに書いている。これは説文篆文と見比べるとおかしな解釈だともう。説文篆文を正字の根拠とするなら、正字は常用漢字の「卑」ではなく、人名用漢

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
單	單	單	單	單			單	單	單	單	單	單
色紙法華經⑧	商先往來	口9										江戸千祿(俗) 現代中国
單	單		單	單								
色紙法華經⑧	書札重宝記											
單												
藤原定家												
南	南	南	南	南			南	南	南	南	南	南
精養本朗詠	節用	十7										現代中国
南	南		南	南								
元永本古今	再版農業全書											
南			南	南								
元永本古今												
卑	卑	卑	卑	卑			卑	卑	卑	卑	卑	卑
藤原朝隆	謹身往來	十6										九経<説> 現代中国
卑	卑		卑	卑								
佚名白詩	節用											
博	博	博	博	博			博	博	博	博	博	博
花園天皇	謹身往來	十10										干祿<通> 現代中国
博			博	博								
後家 純消息往來												

字の「卑」の方だろう。中国常用も「卑」を採用している。
【博】右上の点はつけないことの方が多くいる。説文篆文を見ても、どうしても点をつけなければならない字体には見えない。干祿字書の字体を五経文字で訂正している。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
卜	ボク うらない うらなう ぼくのと								
占	セン うらなう しめる うらない								
卦	ケカ うらかた								
卯	ボウ う								
卯									

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
印	イン しるし 教4常①								豊替指歸
危	キ あぶない あやうい あやぶむ 教6常①								杜家立成
危									豊替指歸
却	キャク かえって しりぞく しりぞける 常①								王勃詩序
卻	②								
即	ソク すなわち たとえ つく もし 常①								王勃詩序
卽	人③								

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												印 現代中国
												危 現代中国
												却 五経<俗> 現代中国
												却 正始石経
												即 現代中国

【印】行書の偏は横線2本を書き「レ」を書くのが一般的な書き順。したがって偏の縦線は下に突き抜けない。一画目は左から右に書く。平安以降は各なし点をつけることが多い。
【却】「卻」の異体字で五経文字や康熙字典では俗字とされているがその出現は早く、漢代にまでさかのぼる。文部省活字

も俗字を採用している。旁を「卩」と誤ったものも多い。
【即】漢代の隸省/隸変である。康熙字典には「卽今作卽」とある。開成石経でもこの字体が使われている。文部省活字もこの字体を採用している。漱石は正字と通字の折衷のような字体を書いている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
卿	キョウ ケイ								
卿									
卿									
厄	ヤク わざわい								
厚	コウ あつい								
厘	リン								
塵	テン みせ やしき								
釐	リ おさめる								

【卿】説文篆文に従えば「卿」になるはずだが、そのような字体は五経文字の他にみつからない。漢代から「卿」を書いており、干祿字書も日本の文部省活字もそれに倣っている。康熙字典は「卿」を採用しているが、「即」の字種では「即」を採用しており、一貫していない。官板五経文字の〈石経〉と

されている字体には「尸」の中に点があるが、これは誤りではないだろうか。『五體字類』(3版)では「尸」の中の点を省いている。
【厄】五経文字の親字ではなく説明にこの字が使われている。
【厘】「厘」「塵」「釐」が同字種の異体字なのか、別字なのか。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												卿 現代中国
												厄 現代中国
												厚 現代中国
												厘 現代中国
												釐 江戸干祿(俗)

古代には「厘」にあたる字体は見えない。王羲之が宋搨祖石経帖で草書の「釐」を書いているが、字体は「厘」のようなので、「釐」の草書から「厘」ができたとも考えることもできる。北魏では「塵」の字種に「土+厘」を書いたり、「厘」を書いたりしている。官板干祿字書では「厘」と「塵」を同字

種、「釐」は別字としている。康熙字典は「厘」の項に「俗作釐省非」とある。漢字要覧では「物ノ数量ヲ記スル時ニ限リテ、別體ヲ用キルモ妨ナシ」とし「厘」は「釐」の異体字の特別な用法とする。明治の漢字も「厘」を「釐」の許容とする。陸軍幼年学校用事便覧は「實ハ別字」とする。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)		説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)		草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)		正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
嚴	ゲン ゴン おごそか きびしい											法華義疏
												王勃詩序
												杜家立成
												聶替指歸
去	キヨ せる											王勃詩序
參	サン まいる まじわる みつ											王勃詩序
參	②											董武天皇雜集

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												严 現代中国
												去 現代中国
												参 現代中国